



日本計量生物学会 ニューズレター

1. 巻頭言	- 1	7. WNAR 年会中止のお知らせ	- 5
2. 試験統計家認定制度について	- 2	8. 2020 年度統計関連学会連合大会の お知らせ	- 5
3. 2020 年度学会賞の授与	- 2	9. シリーズ「計量生物学の未来に向けて」	- 6
4. 2020 年度社員総会（評議員会）議事録	- 3	10. 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い	- 7
5. 2020 年度理事会議事録	- 3	11. 編集後記	- 8
6. 2020 年度年会中止および会員総会のお知らせ	- 5		

1. 巻頭言「ナイチンゲールとヴィジュアル化」

酒井 弘憲（エーザイ株式会社）

本来なら今ごろ、オリンピックでお祭り騒ぎのはずだったであろうが、COVID-19 パンデミックのおかげで思いもよらぬ事態となってしまった。筆者が会報担当理事を拝命していた 10 数年前の理事会で、広島大学の瀧川先生が新型インフルエンザ・パンデミックの危機について繰り返し警鐘を鳴らしておられたことを今更ながらに思い出す。瀧川先生には申し訳なかったが、100 年前のスペイン風邪の当時とは医学知識も医療環境も違うのだからと、当時あまり気にも留めていなかったことがいま世界中で怖ろしい現実問題として眼前に展開されている。

COVID-19 対応で感染のリスクにも敢然と立ち向かい業務に従事されておられる医療関係者の皆様には心から感謝と敬意を表するものである。

COVID-19 の影響で臨床試験において多くの予期せぬ中間事象（患者が来院できなかつたり、試験自体が中断して欠測値が生ずるなど）が発生し、その対応のなかで、医薬データを扱う生物統計家は改めて ICH E9(R1)を認識させられたりしたのではないだろうか。

そのような状況下で、まずは、筆者の体験から書き起こそう。これまで軽い高血圧と花粉症以外に持病もなく、病院にお世話になることもほとんどなかった筆者であるが、昨年 12 月に突如として腹膜炎を伴う重症虫垂炎を発症し、緊急入院、手術を受ける羽目に陥ってしまった。このとき、一人の患者として改めて医療スタッフの方々の働きに素直に頭が下がった。土日もなく回診してくれる主治医はいうまでもないが、看護師さんたちの献身的な働きには心の底から感謝の気持ちが沸き上がったし、神々しくさえも見えたものである。

看護師といえば、統計家の端くれとしてはナイチンゲールを思い出さずにはいられない。奇しくも 2020 年 5 月 12 日は彼女の生誕 200 年という記念すべき日であった。筆者がレギュラトリーサイエンス誌に連載している「データサイエンスへの誘い」でナイチンゲールのことを書いた回（2018 年 10 月 Vol. 49, No. 10, pp700-705）で不謹慎にも、「筆者は幸いにも入院するような経験もないが、できれば、天使のごとき女性看護師さんに担当してもらうことを妄想している」という趣旨の戯言を書いたが、きっと天罰が下った（いや、逆に願いが叶った？というべきであろうか？）のであろう。

ナイチンゲールの話に戻れば、彼女はモデル式を弄ぶこともなく、クリミア戦争における兵士の死亡統計を取り、目の前のデータを丹念に拾い上げ、それをグラフ化し、bat wing chart/ rose diagram とよばれる彼女独自のデータ可視化の表現を生み出した。スクタリ病院では、戦闘行為そのもので死ぬ兵士よりも、極端に劣悪な衛生状況が原因で蔓延した伝染病や感染症で死亡する兵士が多いという事実にも愕然としながらも、チーム・ナイチンゲールは、病院のトイレ掃除から衛生状態の改善に取り組み始めた。その結果、2 月には約 42%まで高まっていた死亡率を 4 月には 14.5%、5 月には 5%にまで急激に改善させたのである。

最近、筆者が気になるのは、若い人たちがグラフを描かなくなっていることである。筆者は 20 年以上にわたって大橋靖雄先生のもとで日本科学技術連盟の統計解析専門コース（通称：BioS）の運営委員、模擬臨床試験を行う総合実習を担当しているが、ほとんどの受講生が、グラフを描かな

いのである。経時データにしてもクロスオーバーデータにしても、グラフでみれば一目でわかることが、複雑なモデル式を構築し、その記述が正確であればまだしも、正確でなくても SAS などのソフトウェアはプログラム上、文法的な間違いがない限り何らかの答えを返してしまうため、モデル式の吟味もなされないまま結果を提示してしまい、結果としてそれが間違いであることに気づかないのである。製薬企業でも「図」よりも「表」を高級(!?)と考えている人がいるようで、治験総括報告書の本文中にグラフ一つ示せばすぐわかることをわざとわかりにくくしているとし

か考えられないような表にまとめているようなケースが散見される。

ICH E6(R2)が参加各国で step5 に到達し、データの質確保がより声高に唱えられるようになり、セントラル・データ・モニタリングにおけるデータの可視化などが叫ばれる時代である。日本では、統計教育のなかでチューキーの Exploratory Data Analysis が取り上げられることも殆どない(せいぜい箱ヒゲ図くらいであろう)と思われるが、高尚なモデル式を教える前にまだ教えるべきことがあるのではないかと思うのは筆者だけであろうか。

2. 試験統計家認定制度について

手良向 聡, 安藤 友紀, 山本 英晴 (試験統計家認定担当理事)

2017年4月に開始しました「試験統計家認定制度」では、臨床研究の統計的デザインと解析・統計家の行動基準に関し深い知識を有し、実践している者を試験統計家 (trial statistician) として認定します。臨床研究の科学的かつ倫理的な質を高めることで人々が有効かつ安全な医療の恩恵を受けること、併せて計量生物学の進歩と発展を目指しています。規則・細則、Q&A、審査基準等の詳細については、学会 HP をご覧ください。

2020年3月に実務試験統計家16名の認定を行い、2020年4月時点で実務試験統計家39名、責任試験統計家30名が認定されています。今後の予定は以下の通りです。2021年度の認定申請のためには2018~2020年度開催の講習会への参加が必須です(細則参照)。

・2020年5月~7月:2020年度 実務・責任試験

統計家認定申請受付

・2020年10月17日(土)午後:「講習会(東京)」, 定員25名

・2020年12月12日(土)午後:「講習会(京都)」, 定員25名

・2021年3月:2020年度申請分 実務・責任試験統計家認定

すでに試験統計家認定を受けられた方については、更新のために有効期間内(5年間)に30単位が必要です(細則参照)。単位が付与される学会・セミナー(日本計量生物学会年会、計量生物セミナー、計量生物学講演会、統計関連学会連合大会、IBC, EAR-BC)に参加された場合は、参加証等の証明書が必要となりますので、更新時まで保管願います。

3. 2020年度学会賞の授与

大森 崇, 松山 裕 (学会賞担当理事)

今年度の日本計量生物学会賞は松山裕氏(東京大学)、功労賞は大橋靖雄氏(中央大学)、奨励賞は杉谷利文氏(アステラス製薬株式会社)でした。以下では、日本計量生物学会賞と功労賞受賞理由について報告いたします。

日本計量生物学会賞を受賞された松山氏は、1992年に東京大学医学部保健学科を卒業後、同大学院修士・博士課程(1996年退学)を経て(1997年東京大学保健学博士取得)、1996年に同大学医学部疫学・生物統計学教室・助手、2000年に京都大学大学院医学研究科医療統計学・助教授、2003年に東京大学大学院医学系研究科生物統計学・助教授を経て、2014年から現職である東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻生物統計学分

野の教授を務められております。氏の研究の中心は、臨床・疫学研究における生物統計学方法論の開発、特に因果推論、欠測データ解析、経時データ解析などであり、Statistics in Medicine 誌8編、Biometrics 誌2編、計量生物学会誌12編をはじめとする数多くの生物統計学方法論に関する論文を公表されております。同氏は本学会における計量生物セミナーや特別セッションなどの演者も3回務められており、国際計量生物学会でも多数発表をされております。また、同氏はこれまで多くの若手生物統計家の教育にも携わってこられ、多くの後進の指導もされております。氏がこれまでに積み重ねた研究成果は日本計量生物学会賞にふさわしいものであるのは明らかで

あり、日本計量生物学会賞の受賞となりました。

功労賞を受賞された大橋氏は、1976年に東京大学工学部計数工学科数理コースを卒業後、同大学院修士・博士課程（1979年退学）を経て（1982年東京大学工学博士取得）、1979年に同大学工学部・助手、1984年に同大学医学部附属病院中央医療情報部・講師、1988年に同助教授、1990年に東京大学医学部保健学科疫学教室・教授に就任されました。1992年には我が国で最初の生物統計学を冠した正式な講座（疫学・生物統計学）を立ち上げられ、東京大学医学部教授として24年間お勤めになられたのち（組織変更を経て、最終所属は医学系研究科公共健康医学専攻生物統計学分野）、現在の中央大学理工学部・教授に就任されました。氏は、我が国の生物統計学のパイオニアであり、臨床・疫学研究における生物統計学の基盤をお作りになり、後進の育成を行ってこられました。現在我が国でアカデミアの重要なポジションにある生物統計学者のほとんどは直接・間接的に同氏

の教え子といって過言ではありません。また、同氏は、長年日本計量生物学会の理事として学会活動の運営を支えてこられました。International Biometric Societyのcouncil memberも長年お勤めになられ、特に、2009-2012年は庶務理事、2013-2016年、2017-2018年は会長として尽力され、学会の発展に大きく貢献されました。会長在任時には、「統計家の行動基準」、「臨床研究に関する日本計量生物学会声明」、「試験統計家認定制度」など日本計量生物学会から社会へ向けた重要な事項の発信にもご助力なされてきました。また、2017年3月に任意団体としての本学会を解散し、現在の一般社団法人日本計量生物学会にスムーズに移行できたのは同氏のお力がなければ成し遂げられなかったことです。氏の本学会に対する貢献および我が国の計量生物学への幅広い貢献はまことに多大であり、衆目の一致するところであり、功労賞の受賞となりました。

4. 2020年度社員総会（評議員会）議事録

大橋 靖雄、寒水 孝司（庶務担当理事）

○2020年度 第1回メール社員総会

日時：2020年3月9日（土）～16日（月）
（メール審議期間）

出席：安藤、伊藤、岩崎、大森、川口、五所、小宮山、酒井、佐藤（俊）、佐藤（泰）、篠崎、柴田、寒水、高橋、手良向、土居、根本、野間、長谷川、服部、船渡川、松井、松山、室谷、山中、山本（英）
欠席：大庭、大橋、嘉田、新谷、菅波、大門、田栗、丹後、平川、松浦、森田、山岡、山口、山本（紘）

第1号議案 2019年度事業報告
第2号議案 2019年度決算報告
第3号議案 2020年度事業計画
第4号議案 2020年度予算
第5号議案 学会賞候補者
第6号議案 功労賞候補者
第7号議案 学会退会処分

審議の結果、すべての議案が承認された（承認40名（回答なし14名を含む））

5. 2020年度理事会議事録

大橋 靖雄、寒水 孝司（庶務担当理事）

○2020年度 第1回対面理事会

日時：2020年3月6日（金）17:00～18:50
場所：東京理科大学（神楽坂キャンパス）
PORTA 神楽坂7階 第3会議室

出席：松井、安藤、大橋、五所、柴田、寒水、高橋、田栗、手良向、船渡川、松山、山本、酒井（監事）、松浦（監事）

欠席：大森、大門、服部、三中
<委任状3通>

定足数を満たしていることを確認した後、定款に従い、松井会長を議長として議案を審議した。

第1号議案 庶務担当理事からの報告
庶務担当の寒水理事から、入退会状況、会員数、事業・会計監査（2月18日）、一般社団法人の役員変更登記と今後のコンサルタント契約、宛先不明者（8名）、2019年度事業報告が報告された。入退会者、2019年度事業報告、3年以上の会費未納者2名の退会処分が承認された。

第2号議案 会報担当理事からの報告
会報担当の船渡川理事から、132号の発行報告(2020年2月下旬)、133号の発行予定(2020年7月下旬)が報告された。

第3号議案 編集担当理事からの報告
編集担当の五所理事から、「計量生物学」の投稿状況と奨励賞の選考の状況が報告された。

第4号議案 会計担当理事からの報告
会計担当の高橋理事から、2019年度決算、年会学生会員発表者旅費補助(奨学金)、WNAR年会若手会員発表者旅費補助(奨学金)、IBC若手会員発表者旅費補助(奨学金)、研究分科会活動費の対象、講師等謝金基準が報告された。2019年度決算が承認された。

第5号議案 企画担当理事からの報告
企画担当の田栗理事から、2020年度第一回企画委員会(2月17日)、2020年度年会(スケジュール、チュートリアル、特別セッション、若手優秀発表賞)、2020年度連合大会、WNAR2020企画セッションが報告された。2020年度連合大会の企画セッション案と若手優秀発表賞の規定案・運用案が承認された。

第6号議案 試験統計家認定担当理事からの報告
試験統計家認定担当の手良向理事から、試験統計家認定の審査(2019年度申請・認定審査結果、審査結果・認定証の送付、認定者の公表)、スケジュール、認定のための講習会、「AMED生物統計家育成支援事業からのご願い」への対応(細則改訂案、運用案、該当者)、試験統計家認定事務局の変更が報告された。

第7号議案 学会賞担当理事からの報告
学会賞担当の松山理事から、学会賞と功労賞の推薦について報告があった。学会賞の候補者と功労賞の候補者が承認され、社員総会の議決を得ることになった。

第8号議案 広報担当理事からの報告
庶務担当の寒水理事から(広報担当理事の代理として)、学会HPの更新の状況が報告され、全面的に更新することが承認された。

次回の理事会の予定

日時：2020年5月15日(木) 年会開催期間中
場所：東京理科大学 葛飾キャンパス
管理棟 4F 演習室
(後日、Web理事会での開催を決定)

○2020年度 第1回 e-mail 理事会

2020年3月27日から3月30日にかけて「2020年度日本計量生物学会年会の中止について」e-mail 理事会を開催した。審議の結果、年会を中止することが理事会で承認された。

○2020年度 第2回 e-mail 理事会

2020年4月3日から4月7日にかけて「2020年日本計量生物学会「奨励賞」候補論文について」e-mail 理事会を開催した。審議の結果、2020年度奨励賞の候補者が理事会で承認された。

○2020年度 第2回対面理事会

日時：2020年5月15日(金) 17:00~18:25

場所：ZoomによるWeb理事会

出席：松井、安藤、大橋、大森、五所、柴田、寒水、大門、高橋、田栗、手良向、服部、船渡川、松山、三中、山本、松浦(監事)、酒井(監事)

欠席：なし

定足数を満たしていることを確認した後、定款に従い、松井会長を議長として議案を審議した。

第1号議案 庶務担当理事からの報告

庶務担当の寒水理事から、登記関連の進捗が報告された。

第2号議案 会報担当理事からの報告

会報担当の船渡川理事から、133号の発行予定(2020年7月下旬)が報告された。2020年度年会の中止、WNAR2020の中止、会員総会の予定の記事(文章は企画担当理事が用意)を掲載することになった。

第3号議案 編集担当理事からの報告

編集担当の服部理事から、「計量生物学」の発行状況と投稿状況が報告された。

第4号議案 会計担当理事からの報告

会計担当の高橋理事から、年会・チュートリアル中止に伴う対応、本部送金の状況、認定事業業務代行の状況が報告された。途上国援助の送金は次年度以降に持ち越すことが承認された。

第5号議案 企画担当理事からの報告

企画担当の田栗理事から、2020年度年会の中止、WNAR2020の中止、2020年度連合大会(企画セッション、今後の日程)、2020年度計量生物セミナー(案)が報告された。web会議システム(Zoom

等)の契約等を検討することになった。
第6号議案 広報担当理事からの報告
広報担当の大森理事から、メーリングリスト(管理サーバー)、学会HPのリニューアルが報告された。メーリングリストは学会HPから運用すること、学会HPのリニューアルの方針(既存サイトは残さない、新着情報データはすべて移行する)が承認された。

第7号議案 試験統計家認定担当理事からの報

告
試験統計家認定担当の手良向理事から、試験統計家認定事務局の変更、2020年度試験統計家認定の予定(審査基準・手順、スケジュール)、認定のための講習会が報告された。

次回の理事会の予定

日時:2020年9月9日(水)または10日(木)

(統計関連学会連合大会開催期間中)

場所:富山国際会議場または富山県民会館

6. 2019年度年会中止および会員総会のお知らせ

安藤 友紀, 五所 正彦, 田栗 正隆, 山本 英晴(企画担当理事)

2020年度日本計量生物学会年会が5月15日~16日に東京理科大学葛飾キャンパスにて開催予定でしたが、新型コロナウイルスに関する感染回避、開催校への配慮の観点から開催中止となりました(http://biometrics.gr.jp/annualmtg_2020/index.html)。同時に5月15日に開催予定だった「因果探索」のチュートリアルも中止となりました。実施予定だった特別セッション「機械学習への招待(1) 統計的機械学習と深層学習」につい

ては、次回以降の年会で開催予定です。詳細が決まり次第、会報やメーリングリストで周知予定です。年会時に開催予定だった会員総会は、9月8日~12日に富山国際会議場および富山県民会館で開催予定の2020年度統計関連学会連合大会において「日本計量生物学会奨励賞受賞者講演および会員総会」という企画セッション内で開催いたします。是非ご出席ください。

7. WNAAR 年会中止のお知らせ

安藤 友紀, 五所 正彦, 田栗 正隆, 山本 英晴(企画担当理事)

The Western American Region of The International Biometric Society (以下WNAAR)の年会が6月14日~17日にアメリカ・アラスカ州アンカレッジで開催予定でしたが、新型コロナウイルス

の影響で中止となりました(<http://wnar.org/event-3603109>)。次回2021年度のWNAAR年会もアンカレッジで開催予定です。改めて、会報やメーリングリストでご案内します。

8. 2020年度統計関連学会連合大会のお知らせ

長谷川 貴大, 船渡川 伊久子(統計関連学会連合大会プログラム委員)

2020年度統計関連学会連合大会は富山国際会議場、及び富山県民会館において2020年9月8日(火)~9月12日(土)の日程で開催されます。プログラムは7月7日(火)に公開されております。9月8日(火)にチュートリアルセッションと市民講演会が行われます。チュートリアルセッションは鈴木譲先生(大阪大学)による「機械学習の数理100問-統計学の使い方より、本質を見抜く力-」です。また、市民講演会は山本 義郎先生(東海大)座長で「RESAS:地域経済分析システムを活用した地域活性(仮)」です。奮ってのご参加をお願いいたします。会場は富山国際会議場メインホール(〒930-0084 富山県富山市大手町

1-2)となります。懇親会は9月10日(木)18時半から富山電気ビルディング(〒930-0004 富山県富山市桜橋通り3-1)で開催します。事前参加申し込みは8月7日(金)から8月28日(金)となっておりますので、参加される方は早めにお申し込み下さい。

なお、新型コロナウイルス感染に伴う影響が各所に出ているところですが、富山現地での通常開催とオンラインでの開催の併用で準備が進められております。詳細プログラムや変更事項は、連合大会ウェブページに掲載されますので、ご参照ください(<http://www.jfssa.jp/taikai/2020/>)。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、感染防止対

策を徹底するため、例年とは異なる大会の運営が行われておりますので、詳しくは 2020 年度統計関連学会連合大会のお知らせ（第四報）をご参照

下さい。また、新型コロナウイルス感染の拡大状況によっては、予定の急な変更等も予想されますことをご承知おきください。

9. シリーズ「計量生物学の未来に向けて」

9.1 一教員として貢献できること

高橋 佳苗（大阪市立大学）

昨今のコロナ禍において、感染拡大の防止への取り組み、新常态への社会のありかたの変化等、会員の皆様におかれましても対応に迫られ、ご心労のことと拝察いたします。

そのような社会状況の中、私はといえば、出産と時期が重なってしまい、職場の理解もあり早くからテレワークに切り替えさせていただきましたが、3月から小学校が休校、4月から保育所も預かり不可となり、家の中で我が子たちとともに、ままならない日々を過ごしておりました。

世間ではコロナに関する各種研究が実施され、私の所属する医学部附属病院の臨床研究・イノベーション推進センター（CCRI）の生物統計部門でも、或るコロナ治療薬の臨床試験を支援することとなりました。直接関わることはできませんでしたが、このことは、社会を脅かす疾病に立ち向かう職種に自身が従事しているということを、図らずも再認識させてくれる契機となりました。

平素には、私は大阪市立大学大学院医学研究科の医療統計学教室の助教も務めさせて頂いております。CCRIにて院内外の臨床研究の計画立案、中央モニタリング、統計解析支援等を行うとともに、医療統計学教室では、学生への講義や研究指導、また、学内外から寄せられる統計相談への対応に従事しています。

近年、医療職の方々の中で、臨床研究を実施するうえでの統計学の重要性への認識が高まっているためか、医療統計学教室に学びに来る学生は、統計学について理解を深めたい医療職の方がほとんどです。勉強熱心な学生が多く、日々の講義や研究指導を通して、私も身の引き締まる思いで

います。一方で、医療職の方々には、臨床統計家になることを目的とされているわけではないため、講義や研究を通じて統計学をどこまで学んでもらえばよいのか、学生によって学びたい知識レベルに個人差もあり、難しさも感じています。将来的に臨床研究等の場で活躍できる人材を輩出するために、統計学を学んだ医療従事者に対して社会から何が求められているか、どこまでの知識、解析スキルがあればよいのか、ということを教員側でも見極めていくことが重要なことと考えています。

また現在、出産を終えて改めて認識したことは、統計学がよりよい医療に繋がっているということです。病気ではないとされる出産すら、手厚い医療に助けられて何とか乗り切ることが出来ますが、その医療は統計学に裏付けられた数多の臨床研究によって支えられています。医療の発展、ひいては計量生物学の発展のために私が貢献できることは、解析担当者として臨床研究支援に力を注ぐことは勿論、更なる臨床研究の活性化のため、一教員として人材育成に尽力することであると感じております。

最後になりましたが、シリーズ「計量生物学の未来に向けて」に寄稿する機会をいただき、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。京都大学の専門職学位課程で医療統計学を学んで10年が経ちました。一度統計から離れたこともありますが、様々なご縁があり、なんとか仕事を続けられています。そのことに感謝し、計量生物学の今後ますますの発展を祈りつつ、微力ながら自分自身も発展に寄与できるよう努めたく思います。

9.2 これからの計量生物学の発展を担う生物統計家の育成

安藤 宗司（東京理科大学）

まず、私の経歴を簡単に述べます。修士課程修了後、企業に就職し、医薬品開発の統計解析職として6年間従事致しました。在職中に博士後期課程に進学し、カテゴリカルデータ解析に関する研究で博士（理学）を取得しました。2017年4月か

ら現職（東京理科大学工学部情報工学科助教）となります。私が思う東京理科大学の特徴は、教育かと思いましたが、教育という側面から計量生物学への抱負や想いを述べていきます。

私が所属している東京理科大学工学部情報工

学科は、経営工学科から改組し2016年4月に開設された新しい学科です。情報工学科では、「ソーシャルデザイン」、「データサイエンス」、「ソフトウェアデザイン」、「インテリジェントシステム」の4分野を柱として、新しい時代の情報システムの研究開発を行っています。データサイエンス分野に3研究室が属していますが、寒水研究室と篠崎研究室の2研究室が計量生物学（特に、医療統計学）を専門としています。吉村功先生、浜田知久馬先生らが中心となり、経営工学専攻のときに社会人向けの「医薬統計コース」にて企業の生物統計家への教育を行っていたこともあり、情報工学科でも医療統計学は重要分野と位置付けられています。現在も大学院情報工学専攻のカリキュラムとして医薬統計関連科目が多数用意されており

ます。寒水研究室と篠崎研究室に配属され、大学院に進学する学生の多くは、医薬品開発の統計解析職に就くことを希望します。実際に、医薬品開発の統計解析職に従事している東京理科大学大学院工学研究科経営工学専攻出身の方は多いので、先輩方の活躍している姿を見て、自分もそうなりたいと思っている学生が多いのではと推察します。

私の指導方針として大事にしているのは、いい意味で学生と対等であることです。私が主に担当している修士課程の学生に指導する際、まず研究に関しては対等な関係であることを伝えていきます。教員から言われたことをやるのではなく、まずは自分自身で考えること、分からないことがあれば教員と納得するまで議論して解決していくことの重要性から説明します。企業で働いていた経験から、自分自身で考えること、自分の意見を

持つこと、そしてそれを発信していくことの重要性を感じていますし、研究でも重要であると思います。学部生のときは教員に言われたことをやることが多いことも影響しているかもしれませんが、修士課程に進学した直後は自身の意見を発信できない学生も多いです。最初に意識を変えるのが大事なので、どのように指導するのがいいのか模索しながら頑張っているところです。

私が現職に着任したとき学部4年生で研究室配属された学生が修士課程を修了し、2020年4月から企業に就職しました。医薬品開発の統計解析職に就いた学生も多いので、計量生物学の発展を担う生物統計家として今後活躍してくることを期待しています。

これからの計量生物学の発展を担う生物統計家になるかもしれない学生を教育するという重要な役割を担っているのだと本稿を執筆しながら、改めて思った次第です。まずは、私自身が計量生物学の発展を担う生物統計家になれるよう、日々努力をしなければいけません。私の周りの教員から学ぶことも多いです、学生から学ぶことも多くあります。博士後期課程の学生には、医薬品開発の統計解析職に従事している方が複数名おり、その方々から学ぶことも非常に多くあります。現在、私は非常に恵まれた環境にいますので、この環境を活かして成長していきたいと思えます。

最後に、執筆の機会を与えてくださったことに感謝を申し上げて本稿を締めさせていただきます。自分自身を見つめ直すいい機会になりました。ありがとうございました。

10. 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い

服部 聡、五所 正彦（編集担当理事）

本学会雑誌である「計量生物学」に会員からの積極的な投稿を期待しています。会員のためになる、会員相互間の研究交流をより一層促進するための雑誌をめざすため、以下の5種類の投稿原稿が設けてあります。

1. 原著 (Original Article)

計量生物学分野における諸問題を扱う上で創意工夫をこらし、理論上もしくは応用上価値ある内容を含むもの。

2. 総説 (Review)

あるテーマについて過去から最近までの研究状況を解説し、その現状、将来への課題、展望についてまとめたもの。

3. 研究速報 (Preliminary Report)

原著ほどまとまっていないがノートとして書き留め、新機軸の潜在的な可能性を宣言するもの。

4. コンサルタント・フォーラム (Consultant's Forum)

会員が現実に直面している具体的問題の解決法などに関する質問。編集委員会はこれを受けて、適切な回答例を提示、または討論を行う。なお、質問者（著者）名は掲載時には匿名も可とする。

5. 読者の声 (Letter to the Editor)

雑誌に掲載された記事などに関する質問、反論、意見。

論文投稿となると、「オリジナリティーが要求される」、「日常業務での統計ユーザーにとっては敷居が高い」などを理由に二の足を踏む会員が多いかもしれませんが、上記の「研究速報」、「コンサルタント・フォーラム」は、そのような会員のために設けられた場であり、活発に利用されることを特に期待しています。いずれの投稿論文も和文・英文のどちらでも構いません。

2004 年度から学会に 3 つの賞が設けられ、その一つである奨励賞は、「日本計量生物学会誌、Biometrics, JABES に掲載された論文の著者（単著でなくても第 1 著者かそれに準ずる者）で原則として 40 歳未満の本学会の正会員または学生会員を対象に、毎年 1 名以上に与えられる賞」です。最近では、履歴書の賞罰欄に「なし」と書くことと公募の際に引け目を感じるくらいです。ここ数年、「計量生物学」に掲載された論文が受賞しており、今

後もこの傾向は続くものと見込まれます。特に、上記の条件を満たす方は、ご自身の研究成果の投稿先として「計量生物学」を積極的に検討されてはいかがでしょうか。

また、特に最近の計量生物学の研究に関しては、英語の総説はあっても、日本語で書かれたよい総説・解説が存在しない分野やテーマが多く見受けられます。日本語での総説論文は、多くの会員に有益な情報を提供すると同時に大変貴重なものになりますので、その投稿は大いに歓迎されます。これまで著者から論文掲載料をいただいてきましたが、学会員が筆頭著者の場合は無料とすることになりました。2013 年発行の 34 巻 1 号からこれを適用しています。

なお、論文の投稿に際しては、論文の種類を問わず、雑誌「計量生物学」に記載されている投稿規程をご参照ください。会員諸氏の意欲的な論文投稿を心よりお待ちしております。

11. 編集後記

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の発生より半年以上が過ぎましたが、残念ながら事態は長期化の見通しです。5 月の年会は中止となりましたが、会員総会は 9 月の統計関連学会連合大会で開催されます。IBC は Virtual で 8 月末まで開催されます (<https://www.abc2020.org/home>)。今号では、東京大学疫学・生物統計学教室の大橋靖雄先生（現中央大学）の功労賞、松山裕先生の学会賞受

賞をお知らせしました。COVID-19 ですが、学術誌にもたくさんの情報が寄せられています。限られたデータから短期間の意思決定が必要なこと、情報が重要であること、普段見慣れない研究デザイン、様々なバイアス、各国の対策の違い、平時の備えなどいろいろと考えさせられます。

（夏の近づく彩の国より）

日本計量生物学会会報第 133 号
2020 年 7 月 22 日発行

発行者：日本計量生物学会
発行責任者：松井茂之 編集者：船渡川伊久子、高橋邦彦